

「言葉の達人」

萩原朔美

「朔太郎の孫」

前橋文学館で乗り越える

内藤 聡

ラジオは鏡みたい

「踏ん張って」

「言葉の原石」

神宮みかん

小説で街を元気に

小川マキ

『KIBOU』に希望

前橋女子高

新聞部

前橋の魅力伝えます

特集

言葉とIT

普通で
素晴らしいのは
朽ちてしまう

shigesato itoi

糸井重里

株式会社ほぼ日代表取締役社長

photo by Shunichi Oda photo retouch by Shinji Iezumi

前橋発、新しい風

創刊号

no.1, take free
web版mebuku
mebuku.city

〈めぶく〉

the maebashi shinbun

mebuku

めぶく街、風を送りたい

コピーライターという職業を世に知らしめ、数々の名コピーを生み出した。エッセイを書き、タレントとしての地位も築く。かと思えば作詞を手掛け、ヒットメーカーとなった。ゲームソフトは自ら進んで作り上げた。「言葉」を大事に紡ぎながら、変身を繰り返す糸井重里さん。ウェブサイト「ほぼ日刊イトイ新聞」主宰は果たして最終形態か。

front side 特集〈言葉〉

取材◎阿部和也
text by Kazuya Abe
撮影◎小田駿一
photo by Shunichi Oda
photo retouch by Shinji Uezumi

99人が 反対した でしょう

——前橋市のビジョンを「めぶく。」と命名しました。この言葉に込めた思いを聞かせてください。

「もともとはドイツのコンサルタントのレポート、前橋はどういう場所で、どうあるべきかをまとめたものを、なるべく短い言葉でみんなが分かりやすく表現しただけなんです。メッセージというよりは翻訳ですね。

日本中の地方都市、みんなそうなんですけど、高度成長の時、同じように成長してきました。強い個性があるわけじゃないから、頑張れば伸び代があるよっていう街ばかりでした。

ただ、（前橋には）住んでいたことがあるので、水が豊かなのは確かだと。水系みたいなものは感じてほしいと思いました。『めぶく。』っていうのは植物から想像するもので、土と水さえあれば育つんですね。その意味でここにはいい土も水もある。そのことを感じられるといいなと思い、日本語を探しました」

川も鐘も30年後見ている

——最近の「めぶく。」情報は入っているのでしょうか。

「よく、掘り起こしているのは分かります。何よりもあきらめていない。あきらめていないのはいいですね。あきらめていないというのが前橋にはある。大どんでん返しを狙っているのではなく、ここをうまくすればいいとか、できることを一つ一つやっている。やれることを探しているのはいいなと思います」

——昨年12月にオープンした白井屋ホテルは中心街のランドマークになっています。



「頭のいい人100人で会議したら止めたでしょう。99人が反対したでしょうね（笑）。ただ、51%勝つ可能性があれば、後から直せるので、頑張れば、あきらめなければ勝つ可能性がある。行政だけだったら、結構厳しいだろうね。やる人がいたってこと、それだけで面白い」
——「故郷が嫌い」と公言しながら、前橋の再生プロジェクトを手伝うようになりました。

「いい動きがある時にそこに風を送る、そのくらいのお手伝いなら僕にもできると思って。（ジンジの）田中仁さんが（市街地活性化に）力を発揮しているのを見て、特にお役には立ちませんが、ちょっと手伝うのはちょうどよかった。気も楽しだし、楽しかった」

——スーパーシティ構想をはじめ、いろいろな「めぶく。」が始まっています。30年後はどうなっているでしょう。

「珍しいことやっている分だけ残るんじゃないでしょうか。普通に素晴らしいの

あきらめていない というのが 前橋にはある

shigesato itoi

糸井重里

いといしげさと
1948年11月、前橋市生まれ。株式会社ほぼ日代表取締役社長。前橋高—法政大文学部中退。コピーライターとして人気を集め、タレント、エッセイストなど幅広く活躍するマルチクリエイター。沢田研二の「TOKIO」をはじめ作詞も数多く手掛け、制作したゲーム「MOTHERシリーズ」は熱狂的な人気を集める。



僕の範囲を 超えるんですよ。 それが 楽しくて、苦しくて

原料費がいらない。仕入れも自分でやる。人に会う機会もたくさん作れました。やるかやらないかも自分でできて、価格の設定も自分でできる。こんな楽しいことはありません」
——作詞やエッセイ、意外なところでは声優やゲームも手掛けています。
「作詞は頼まれて始めました。プロデューサーが自分を使ってくれたからです。だいたい若いころから受け身でやるのがほとんど。『えー、俺がやるの』。そういうものの連続でしたね。
ゲームだけは違いました。プレーするのも作るのも面白くて。任天堂の社長にこういうゲームのアイデアがありますと持って行って。実際に作るまでは大変でしたが、ちゃんと形になりました」

「めぶく。」の後は「まなぶ。」

——新たにやりたいことはありますか。
「いまは先日開校した『ほぼ日の学校』のことですね。いろいろな人の手を借り、頭を借り、心を借り、時間を借りて。僕が言い出したことだけど、僕の範囲を超えるんですよ。それが楽しくて、苦しくて、もうコントロールしようがない。
『台風後の川』みたいなもので。氾濫を起こしている。氾濫した後は『めぶく。』でしょ。楽しみですね。学校のプロジェクトを始めてからは夜中に起きちゃうんですよ、アイデアがわいて。ずっとそんなことはなかった。若い新人に戻っちゃったからでしょうかね。
全部、学校という入れ物に入れると、何でもできるんです。『人が人から学ぶ』というのが重要な局面なんです、(普通の)学校の外で学んだことの方が大事で、そっちを学ぶ学校を作ったかった。この人に会えてよかったなと思えるような。
その象徴として、赤いねじり鉢巻きのボランティア、尾畠春夫さんも『ほぼ日の学校』では先生なんですよ。僕も年を取ってきたから、自分だけが美味いって喜ぶんじゃなくて、人が食べて美味しくしていることで楽しくなるんですね。人が喜ぶのをみたくて、無理をしたり、楽しんだりして。いろんな物事を組み立て

ているのが、いま一番楽しい仕事ですね。
『めぶく。』の後は『まなぶ。』ですかね」
——「ほぼ日」では毎日、エッセイを書いていますね。
「毎日、文字書いて23年間。違うこと書いているから続いているんでしょうね。一本の長編じゃ、とっくに飽きていると思います」
——書き溜めることは？
「ないですね。毎日夜中の3時、4時に書いた記事が11時に更新されています」
——「ほぼ日」に新聞を付けました。新聞は好きですか。
「新聞、好きですね。何やってもいいからでしょうか。恐竜博やるのも新聞、美術館で展覧会やるのも新聞、講演会やるのも新聞。球団を持つのも新聞ですよ(笑)。時間で動いているというか。不朽の名作を作るんじゃないくて。毎日を生きて瞬きしている。新聞っていった方が動いている気がします」

焼きまんじゅう、どら焼き…

スイーツ 問題は皮なんです



「思い出の味といえば、焼きまんじゅうですね。今も前橋に行ったときは店に行って焼き立てを食べます」。上州のソウルフード、焼きまんじゅうで糸井さん一押しは原嶋屋総本店。1857(安政4)年創業という最古参の店だ。
5代目店主、原嶋雄蔵さんは「よくご家族でお見えになってくれます。糸井さん



は気取らず、豪快に、おいしそうに食べてくれます。2本、3本食べますよ」と見事な食べっぷりを絶賛する。
「片原饅頭も散々食べました。どっちもまんじゅうですね」と照れ笑いする糸井さんに前橋でいま、超人気のスイーツを試食してもらった。なか又の「ふわふわ わぬき」。定番のどら焼きの生地を最大限「ふわっふわっ」に仕上げた。
「粉に中心を置くことが大事だと気が付いた人がつくったものですね。いまこれが求められているんです。アンコはあまり変わらない。問題は皮(生地)なんです」と指摘。「原嶋屋さん皮がうまいんだよね」と独特のスイーツ論を披露してくれた。



photo by Minoru Kobayashi

岡本太郎氏の「幻の作品」

太陽の鐘：岡本太郎氏が1966年に制作した高さ6mの造形作品。長く倉庫に保管され、幻の作品とされていた。利益の一部を前橋のまちづくりのための寄付金として拠出している太陽の会が仲介や修復費用を負担、2017年10月、広瀬川河畔に設置された。

まちづくりのビジョン

「めぶく。」：2016年8月に発表した民間と行政が協力して展開する前橋市のまちづくりビジョン。コンサルティング会社の調査報告をもとに糸井重里さんが独自の解釈を加えて表現した。ビジョンを達成するための戦略が課題解決にデザインを大事にする「デザイン都市」。

古典もボランティアも

ほぼ日の学校：古典を学ぶ場として、2018年に「ほぼ日の学校」をウェブサイトで開校。シェークスピアやダーウィン、万葉集、歌舞伎などをテーマにした。今春から「ほぼ日の学校」に改称、アプリになってリニューアルした。古典に限らず、ボランティアなど幅広く学ぶ。

就職するの嫌で漫画を描く

漫画：中学から大学まで漫画を描いていました。中学時代は市のコンクールで教育長賞を取りました。SF仕立てのショートのような。就職するのが嫌で描いていたわけで、根性や才能があったわけではなくて。

利根川河原「いい遊び場」

思い出：河原で遊んでいました。群馬大橋の下。いい遊び場でした。煥乎堂はよく行きましたね。社長の娘さんが同級生で、絵を描くとき、顔に目や鼻を入れないんです。でも、かっこいい絵なんですね。

大きな影響受けた亀島先生

会いたい人：高校の現代国語の先生、亀島貞夫先生です。もうお亡くなりになりましたが。とても大きな影響を受けました。大学時代もおじゃまして、話をしました。

photo by Nahoko Abe

me・zu・ku

そして種は 次の芽吹きに備える

朝日印刷工業株式会社

<https://www.asahi-p.co.jp>

言葉の達人

ちょっとした言葉に怒り、悲しむことがある。
ふとした言葉に喜び、励まされることもある。
言葉で優しく寄り添える「言葉の達人」がいる。

「言葉を粗末に扱うということは、人生を粗末にしている」。前橋文学館長就任にあたり、こんなメッセージを記している。

「私たちは言葉で歌い、言葉で考え、言葉で感じる。すべて、言葉が先行している。言葉をやせさせる人がいます。『誠意を持って迅速に対処する』なんて鸚鵡(おうむ)返しに国会で答弁されると、誠意が誠意でなくなってしまう。没後80年の来年、全国34館で『朔太郎大全』という企画をします。詩人しか言葉の意味を深めようという人はいない。詩人を見直すことで、言葉と人間の関係を見直す機会だと考えています」

萩原朔太郎が友人に宛てた1918(大正7)年の書簡が見つかった。「目下流行の例の悪風邪に犯され」と書き記し、スペイン風邪に感染していたと推測される。「10歳年下で第1詩集の出版を考えて

いた竹村俊郎を励まし、実際に詩集に長い文章を書いている。朔太郎は第1詩集(『月に吠える』)が出て、世間の評判を得た時だった。そこから3年、何も書いていません。2作目が1作目を超えるために悩んでいた時期だったと思いますよ。自分の第1詩集の時、北原白秋らに多くの文章を書いてもらった。だから、後輩にも頑張って書んど、寝ていても手紙にしたでしょう」

「天井桟敷」で役者デビューし、雑誌『ビックリハウス』で1970年代、80年代の渋谷系サブカルチャーを生み出した。

「文学館に呼ばれた役割は何なのか考えたとき、毎日お祭りが開かれている場所にしないとダメだと。それで、詩の音読を始めました。黙読は理解する。音読は心

嫌だった “朔太郎の孫” いま乗り越える

に響かせるものだという。詩を役者に音読してもらったらどうなるか、そういうチャレンジをした。自分は役者だったので、セリフのように読んじゃう。二十歳のころは下手だったけど、いま、うまいんですね(笑)」

朔太郎を祖父に、作家の葉子を母に持つ。言葉を大事にした人が身近にいた。「『朔太郎の孫』と言われるほど嫌なことはなかった。朔太郎の仕事は一切タッチしなかった。でも、70歳過ぎて、いつまでも嫌いだなんていうのは大人気ない、と思ってここに来たんです。乗り越えるには文学館の仕事が楽しいと思わなければいけない。それで、『朔太郎大全』を言い出したんですよ。いまでは詩を読んでも平気です」



photo by Koichiro Nomoto

前橋文学館館長

萩原朔美

はぎわら・さくみ 1946年11月、東京都生まれ。「天井桟敷」の旗揚げ公演で初舞台を踏む。俳優の傍ら演出を担当、映像制作も始める。版画や写真、雑誌編集とマルチに才能を発揮する。

前橋文学館

企画展『さくたろういきものずかんー朔太郎の世界を闊歩する生物たちー』
期間: ~9月26日/9時~17時/水曜休館(祝日の場合は翌日)/一般500円、高校生以下無料



photo by Minoru Kobayashi

これ以上 頑張れない だから 踏ん張って

エフエム群馬パーソナリティー

内藤 聡

ないとう・さとし 1975年6月、藤岡市生まれ。高校時代は野球部に所属。大阪芸術大在学中に放送業界に入る。大阪、神戸、名古屋、北海道のFM局でDJを務める。

FM GUNMA『WAI WAI Groovin'』
月~金/7時半~11時

「ボンジーアー」。午前7時半。この絶叫で群馬の朝は始まる。エフエム群馬の看板番組『WAI WAI Groovin'』のオープニング。リスナーに元気にあいさつする。

「自分へのスイッチ。毎朝、緊張しますよ。聞いている人のスイッチにもなるから責任感感じます。調子悪かったら気合入りませ

ん。ポルトガル語の『おはよう』です。日系人の友人が多く、名古屋の放送局時代から使ってますが、ようやく群馬でも受け入れてもらえました」

音楽の合間、スタッフから東のようなメールが届く。

「毎朝、1000通は来ますからね。コロナの影響で小学生や中学生からもたくさん

来るようになった。放送中に読まなかったのもすべて見ます。毎日、交換日記をしているようです。医療従事者や飲食店の方からは悲痛な声も届いています。ボクも生半可な言葉は発せられない」

名古屋などで活躍し、エフエム群馬に移ったのは2015年4月。開局30周年を記念した改編の目玉として迎えられた。

「40歳になる年で、DJになって20年。もう腹をくりました。実は以前から『群馬に戻りたい』って話していたんです。もちろんプレッシャーは大きかった。でも、好きな地元で好きな仕事ができ、豊かな自然のもとで家族と暮らせる。こんな恵まれたことはありません」

3児の父。番組では子育ての話をよく取り上げる。恋愛、介護、仕事、勉強…。悩めるリスナーにそっと寄り添う。

「上っ面で話したら傷つくでしょう。大したことは言えないけど、隣に寄せてもらえるような言葉を伝える。辛い立場にいる人に『頑張って』とは言えない。プレッシャーになりますから。病床にいる人は毎日頑張っている。もうこれ以上頑張れない人も。だから『踏ん張って』と言います。もうひと踏ん張りしましょうねって。どの世代にも突き刺さりますね」

午前11時。3時間半の番組が終わり、最後の雄たけび。「アテジャー(またね)」。

朔太郎が愛した100年カレー

西洋文化に強い憧れを持っていた萩原朔太郎は洋食を好んだ。「一切洋食でなければ食はず、バタ臭くない物は、人間の食物でない」と自著で若いころを回顧している。

朔太郎が愛したカレーがある。弁天通りの一番北にある「ボンチ」。開店は1920(大正9)年と1世紀の歴史を誇る。

継ぎ足してきたルー

自慢のルーは創業時から継ぎ足してきた。改装のため2年ほど休んだ間も、1日たりともこの作業を怠らなかった。

朔太郎が好きだったメンチカレー。創業時と同じ銀色の楕円形の器に盛られてくる。

黄色がかったルーはどこか懐か



しい。野菜が溶け込んだ優しい甘み。ラードでコクを出しているが、しつこくはない。いまでは間違いなく和風に入るこのカレー、当時は洋風の最先端、「ハイカラ」だったのだろう。

メンチはロケットのような大きな塊が2つ。肉感がすごくボリュームミ

ーだ。でも、ステーキが好きだったという朔太郎は案外ペロリと平らげたのかもしれない。

変わらぬレシピ、材料

店主の町野義幸さんは4代目。「創業時のレシピを守っています。県産の豚肉や玉ねぎといった材

料も同じ。うちを鼻屑にしてくれるお客さんがいる限り、この味を守っていきます」。職人氣質の店主は気合を込めて、きょうも101年目の厨房に立つ。

朔太郎を読んで酔う

弁天通りをボンチから南へ50メートル行ったら「ブックバー 月に開く」がある。朔太郎ファンが3年前に開店、いまは常連だった上月えるさんが切り盛りする。

大きな本棚には小説、実用書、漫画とさまざまなジャンルの本がぎっしり。もちろん、朔太郎全集もある。好きな本を片手にアルコールやコーヒーを楽しめる。ドリンクで人気なのが「大人のクリームソーダ」。焼酎が入っていて、不思議な味を体験できるとか。



1世紀前、開店した当初のボンチ(写真上)。2年前に大改修した新店舗は大正モダン漂う店構え



ボンチ

前橋市千代田町3-3-18
☎027・231・2333
火・水=17時~21時半/木・金=11時半~14時、17時~21時半/土=12時~15時、17時~21時半/日=11時半~15時/月曜定休、臨時休あり

月に開く

前橋市千代田町3-3-22
☎070・1483・4472
15時~22時/定休日:月・火・水
※営業時間は変更になる場合があります



好立地、ぞくぞく。

「住める街に住む」のではなく、「住みたい街に住む」。
たとえ憧れの街が東京をはじめとした都心であっても、
それは決して夢ではありません。

独自の企画力で、設計力で、提案力で、あなたの夢を形にしたい。

私たちオープンハウスグループは
不動産業界の常識にとらわれることなく、お客さまの視点に立って、
住まい探しを応援しています。



OPEN
HOUSE

オープンハウスは、「戸建事業」を中心とした「収益不動産」「マンション」「海外不動産投資」の4つの事業を展開しています。また、土地の仕入れから販売まで、全ての工程をワンストップで行う「製販一体型」によって、お客様へのスピーディーでリーズナブルな戸建てのご提供を目指します。

GUNMA × OPEN HOUSE

協力し合うからこそ実現し得る、豊かなまちづくり

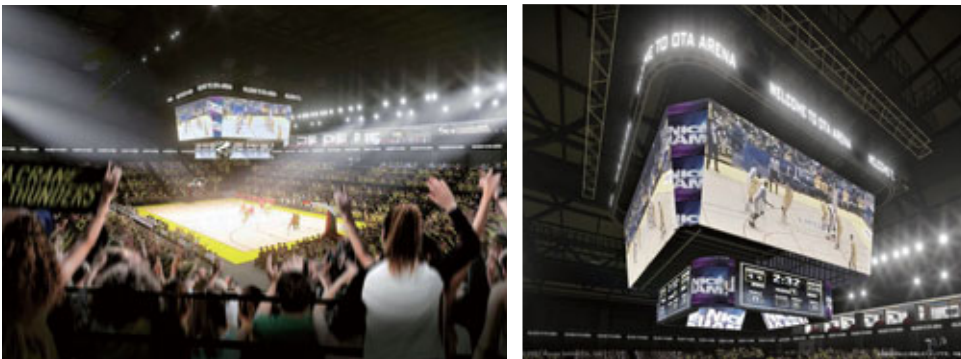
群馬クレインサンダーズ

「バスケットで群馬を熱くする」を理念として掲げ、バスケットボールを通じて群馬を盛り上げていこうと立ち上がったのが、群馬クレインサンダーズです。

2020-21シーズンのB2リーグにおいては初の栄冠をつかみ、B1昇格を果たしました。



地域共創を象徴する“夢のアリーナ”



「OTA ARENA(仮称)」では、建設にあたっての財源として、オープンハウスによる企業版ふるさと納税を活用し、自治体・民間ともに軽い負担で最高のアリーナを建設するというスキームとなっています。チーム・自治体・企業が三位一体となって地域課題の解決に努めるとともに、スポーツを活用した地域共創の先進事例を作り上げ、日本全国から注目を集めるようなアリーナ建設ならびアリーナ運営を目指し、群馬県での交流人口増加に向けて取り組んでまいります。

企業の森活動を実施

環境意識を持つ企業が、都道府県等の森林所有者、NPO法人、地域の方々と協力して、植樹、下草刈り、間伐などの森林整備・保全活動等に取り組む活動を行っています。環境保全の一環として、森林の健康状態を維持・回復することにより、森林が持つ二酸化炭素の吸収量を改善し、地球温暖化の防止にも寄与しています。



木造分譲住宅で、サステナブルな世界を実現するために

国産木材と分譲住宅のさらなる可能性と、価値向上を実現するために、「株式会社三栄建築設計」「株式会社オープンハウス」「ケイアイスター不動産株式会社」の3社が垣根を超えて手を取り合い、日本木造分譲住宅協会として挑戦してまいります。



一般社団法人日本木造分譲住宅協会では新規賛助会員を募集しています。入会のお申し込み方法については、お問合せページよりご連絡ください。

日本は未来を、本気で考える。



三栄建築設計 × KEIAI × オープンハウス



街を元気にしよう ペンの力でお役に

小説家

神宮みかん

「いらっやい、未来の文豪さん」
「お茶飲ませてね」
中央通りにあるパンと弁当のベニフク。店の奥の椅子に座り、お気に入りのロールケーキを口に運ぶ。店主の福田裕美子さんと談笑しながら、時よりメモを取る。「ここ来ると落ち着くし、何気ない世間話の中にも小説のヒントがあるので」と通い詰めている。
小説を書き始めて10年。昨年1月に製作した『小説でこの街を元気にしよう!』が話題になっている。街中にある店を舞台に、恋する受験生や絆を確認する老夫婦などを描いた短編集だ。
ベニフクは第一号で取り上げ、福田さんも実名で登場する。他にも、バーラーレストラン「モモヤ」、「鈴木ストア」といった街中にあり、長く市民に親しまれている実際の店や店主、名物料理がでくる。
「街おこしを考える人たちと接する中で、自分のペンの力で何かお役に立ちたいと思うようになった。個性的な店、魅力的な人がいっぱいいる街が子供のころから好きだから」。そう願い店を回り、店主と話をしする。
シリーズは9作。「読者が小説に出てくる店を訪れる“聖地巡礼”が実現できればいいですね」
検事を夢みて挫折。会社員にな

った。転機は3・11。「東日本大震災の直後、日本が進むべき道を示してくれたのは小説家だった。自分もそんな風になりたいと思った」。それから机に向かい創作に励んでいる。30歳からの挑戦だった。
目指すのは「大衆文学」。「誰でも理解できて、読後感がさわやかな一冊を書きたい」と言葉に力をこめる。
「何とか大きな賞を取って、小説と街との相乗効果をもたせたい。厳しい世界だけど、みんなが温かく応援してくれる。諦めたら試合終了。全力で努力していきたい」。役に立ちたいと思った街中から元気をもらっている。
じんぐう・みかん 1981(昭和56)年11月、富岡市生まれ。小学校から前橋市に転居。前橋高一慶応大。三田文学会員。著書に『頭取と私』など。
『KIBOU』に希望
人に寄り添う歌に
作詞家、シンガーソングライター
小川マキ
『今 溢れ出す想い 届けよう
大切な君の笑顔 守るため
希望をひとつ果てなく続く未来へ
そっと詰め込んで』
(『KIBOU』より)
東日本大震災を受け、「荷物一つに希望を一つ入れて」をコンセプトとするCMソングが制作された。2012年の大みそか、紅白歌合戦でTOKIOが熱唱、テレビ画面に作詞家のクレジットが流れた。

言葉の原石



言葉で感動を。言葉で元気を。
言葉で真実を。もがきながらも明日を
夢見る、「言葉の原石」がいる。

「自分の分身が紅白に出られたと感激しました。友達からも「名前が出たね」とメールが来て。『希望』を見いだせた気がします」
大震災から10年。コロナ禍でライブが軒並み中止となっている中、作曲も手掛けた『うしろさな願い』をYouTubeで公開している。
「大震災の直後も一切の活動を自粛していて、何もできない歯がゆさを歌にしました。いまでもそうですね。心が折れそうな人々に寄り添う歌になればと思います」
ミュージカル活動を経て、2002年からシンガーソングライターになった。活動が認められCMソングや人気グループの作品を手掛けるようになった2008年、10万人に1人の難病を発症した。
「当時、舞台の主題歌を任されていて、この歌が遺作になるかも、と



おがわ・まき 都内の芸能スクールで演劇や歌を学び、ミュージカルを経て音楽に専念。前橋女子高時代はテニス部に所属、インターハイに出場した。
覚悟しました。治療方法が確定し、かすかな希望が見えたとき、『生きる力』が湧いてきた。2年間、治療に専念し復活した。
音楽活動を始めて20年。作詞、ライブを続けるかたわら、「ポジティ

ブに生きる」をテーマに講演もしている。「前は『紅白に出る』とか『武道館でライブ』とか大きな夢物語を描いていた。今は私の歌が大切な人たちのお役に立てるなら頑張りたい、そう思っています」。等身大の自分に戻って歌い続ける。



photos by Nanako Abe

辛い記事も逃げず 前橋を魅力的に

高校生記者

前橋女子高 新聞部

職員室の近く、新聞部の部室がある。使い古した机が一つ。資料が雑多に置かれた空間で高校生記者が企画を練り、記事を書く。
部員は総勢18人。今年の県高校新聞コンクールで最高の知事賞を獲得した。19年ぶりの快挙を「前年が2位だったのでうれしかった」と部長の井口和香さんは素直に喜ぶ。
連覇を目指した最新号。蓄積したノウハウが通用しなかった。コロナ禍で取材が制約される中、いかに斬新な紙面を作るか。答えは「前橋に特化」。安藤美結さんは「遠くに取材に行けない分、地元の情

社会性のある素材にも果敢に取り組んだ。修学旅行が中止になった時は校長先生に直当たりし決定に至る説明を求めた。インターハイや総合文化祭中止の辛い記事も逃げずに書いた。
「探求心を持つこと、実際に足を運ぶことを大切にしたい」(井口さん)、「人との出会いが人生を豊かにすることを学んだ」(横堀さん)、「コミュニケーション能力を鍛えられた」(安藤さん)。この夏に引退する3人。記者生活を完全燃焼した。



まえばし・じょう・しんぶん 1950(昭和25)年度、生徒会文芸部から独立して創部した。年1回、タブロイド判の「MJジャーナル」を発行、随時、速報版も出す。



毎週日曜日に開かれる「読み聞かせ会」は子供に人気(写真左)。店内には椅子が置かれ、座り読みができる。



無料で貸し出すキッチンでは料理教室が開かれる(写真はワインのつまみ教室)。

TSUTAYA BOOKSTORE

図書館？ 喫茶店？ 座って読める16万冊

JR前橋駅北口に昨年12月誕生した「アクエル 前橋」。1階には「TSUTAYA BOOKSTORE」が出店した。本や雑貨を通じて生活を提案する新しいスポットとなっている。
「はじまるよ、はじまるよ」。人工芝が張られたキッズスペース。スタッフの志村綾香さんの手遊び歌でお待

ちかねの読み聞かせ会が始まる。絵本を広げ、感情たっぷりに言葉を奏でる志村さんの世界に子供たちは夢中。「お寿司は何が好き?」。絵本のセリフに「ぼくマグロ」「私イクラ」と返事が返ってくる。
入口正面には「群馬の本」のコーナーがある。食や歴史、旅をテー

マにした書籍が集まる。「ほぼ日ブックス」は糸井重里さんのエッセイや絵本がある。
カフェ&バー「PRONTO」では、コーヒーを飲みながら購入前の本の試し読みができる。フロアには8カ所、座って読書できる場所がある。図書館にきたようであり、PRONTOの飲

み物を持ち込めるから喫茶店のようでもある。
専門書から雑誌、コミックまでさまざまなジャンルの書籍がそろそろ。何と16万冊。探したい本は検索機でみつけれ、カウンターでも探してくれる。食品・キッチンのコーナーの一角にはキッチンがある。無料で貸し出ししており、これまで、ワインに合うつまみやスイーツの教室が開かれている。

TSUTAYA BOOKSTORE
前橋市表町2-30-8
アクエル前橋1F
☎027-212-1024
10時～22時／年中無休
PRONTO
前橋市表町2-30-8
アクエル前橋1F
7時～23時／年中無休

発進・加速はゆるやかに。エコドライブに心がけよう。

START YOUR IMPOSSIBLE 

いぶき、 めぶき、 めぐる。

今日もどこかで、小さな未来の若芽が背を伸ばそうとしている。
人々の営みが、夢が、文化が、調和しながら大樹のように育ち、
新たにめぶく次の世代を支えていく。そうして命がめぐりながら、
前橋のまちは、個性豊かな息吹があふれる場所へ変わっていくんだね。

群馬トヨペットも、このまちを活気づけるみんなのカーライフを支え、
私たち自身も地域のお客様に支えられながら、共に年輪を重ねていきます。
みんながドライブに出かけたくなる、大きな、大きな、森を目指して。





Hello Maebashi!

ブルーボトルコーヒー 白井屋カフェ
9月下旬オープン

VISIT US! 群馬県前橋市本町 2-2-15「白井屋ホテル」敷地内、馬場川通り沿い

ITの希望

ITは生活を劇的に変えてくれる。
快適になり、潤いも与えてくれる。「ITの希望」の星がいる。

「ITの希望」の星がいる。それは、前橋市立前橋高等学校の生徒、伊佐碩恭（いさ 碩恭）君だ。彼は、県内初の本格的競技プログラミング大会として、2017年3月に始まった「群馬プログラミングアワード（GPA）」記念すべき第1回大会、1人の天才少年が突如現われた。当時、高校3年生。テクニカル部門を衝撃的な強さで制し、全国から集まったプログラミング仲間だけでなく、IT業界にまでその名を知らしめた。

「直前に大学受験があり、大会の前まではプログラミングを思う存分できなかったのが、楽しかったし、1番になって高校生最後のいい思い出になった」。前橋市の自宅には今も大事そうに優勝パネルを飾っている。

GPA優勝の副賞で米国シリコンバレーへの研修ツアーに行き、大きな収穫を得た。「医師になることを目指していたが、プログラミングを活かして、インパクトを与えられるかもしれないと思った」。現地で成功を夢見る若き起業家たちのパフォーマンスを目の当たりにして、運命的なものを感じ取った。

天才プログラマー AIと医療の融合を プログラマー 伊佐碩恭

県内初の本格的競技プログラミング大会として、2017年3月に始まった「群馬プログラミングアワード（GPA）」記念すべき第1回大会、1人の天才少年が突如現われた。当時、高校3年生。テクニカル部門を衝撃的な強さで制し、全国から集まったプログラミング仲間だけでなく、IT業界にまでその名を知らしめた。

競技プログラミングに出会ったのは中学2年の夏。都内であった日本情報オリンピックのセミナーで指導を受けた。「数学が好き。アルゴリズムを学べ、コンピューターを使って問題解決できるのが面白かった」

独学で学び、海外サイトを探してはコンテストに参加し腕を磨いた。すぐに頭角を現し、国内大会で優勝。世界大会でも銀メダルを獲得した。

東京大理Ⅲ類に進学すると、さらに大きな目標ができた。世界の強豪大学と競う大会、ICPCだ。出場するのは情報工学や数学を専門とする学生がほとんどだが、伊佐さんは医学との「二刀流」を貫いた。

2人の仲間とともに超難関である大学予選を突破し、2019年から2年連続で日本代表となった。

残念ながらコロナ禍でICPCは延期されたまま。それでも昨年のチームは東大内で歴代最強チームとの呼び声が強く、「オ

ンラインでの大会でも開催されれば、ぜひ世界の頂点を極めたい」と希望を捨ててはいない。大学5年生となり、病院での実習も始まった。再来年は医師国家試験に臨む。競技とは距離を置かざるを得なくなるが、プログラミングは「一生の相棒」だ。「一つのアプローチとしてはAIの活用がある。医療とプログラミングとの融合を進めることで、医療を進化できる」。5年前のシリコンバレーでの直感を実現させようとしている。



photo by Nahoko Abe

食べるの大好き 笑顔でデカ盛り完食 ユーチューバー aco

大きな寿司桶に盛られた4・3のカツカレー。10人前のバスタ。熱々の二郎系カレーはすべてマシマシ。驚きのデカ飯を前にまず髪をまとめ、「戦闘服」と呼ぶ紙エプロンを装着してから「いただきます」。食べる量とギャップのある細身で美形の女性ユーチューバーが人気を集めている。

グルメプロガー、ナツさんを師匠にデカ盛りチャレンジを始めたのが5年前。「食べ方を客観的に見て勉強するために動画の撮影をしていた」のがきっかけでユーチューバーになった。初投稿は2019年2月。チャンネル登録者はすでに9万人に

達し、10万人超えがみえてきた。笑顔を決やさず、きれいに食べるのが高評価につながっている。「もともと食べるのが好きなので自然と笑顔になる。苦しい時はスポーツのような感覚です。根性だけはあります（笑）」 「デカ盛りの聖地グンマ」出身であること以外、プロフィールは未公開だが、前橋市に出没する機会が多い。栄久庵で2・5のうどんを10分27秒で完食し、追加でカツ丼を注文。さぶちゃんでは焼きまんじゅう10本を25分以内で食べる企画に挑み、残り5秒で2個を口に押し込んだ。1月にナツさんと入籍「食の趣味や性格も双子のように似ていて自分らしくいられる。将来は大食い夫婦で全国をキャンピングカーで旅したいですね。おいし



あこ 誕生日は7月15日。本名、年齢は非公。acoデカ盛りを配信。ナツさんは「デカ盛り」と当地グルメ食べ歩きブログで人気を集めている。

目標は全国制覇 マエバシを聖地に 暴れん坊FC

あばれんぼう・えふしー 2019年に結成、昨年の国体予選で初優勝を果たした。3人とも社会人。チーム名は市立前橋高校のOBでつくるリアルチームから取った。

「デフィンスライン上げて」「左サイドを突こうよ」 JR前橋駅前にある群馬県スポーツ連合の拠点「gespo（ゲスポ）」。サッカーのeスポーツ「ウイニングイレブン」（ウイイレ）で真剣勝負を繰り広げるプレイヤーがいた。昨年の国体予選県王者、いつもはオンラインで腕を磨くが、予選を控え最新機種の整った施設で実戦に励んだ。



photo by Nahoko Abe

me bu ku

前橋新聞「me bu ku」 summer 2021 no.1 (創刊号) / 7月19日発行 編集長：阿部和也 編集：阿部奈穂子 クリエイティブスーパーバイザー：三浦崇宏 アートディレクション&デザイン：トサカデザイン(戸倉 巖、小酒保子) 印刷：朝日印刷工業株式会社 発行：mebuku編集室 〒371-0022 群馬県前橋市千代田町2-7-10 お問い合わせ：maebashi@mebuku.city 次号は2021年10月に発行を予定しています。

幼馴染の平石早朗さんと森田秀斗さん。小学校から社会人になった今でもサッカーをし、同時にウイイレも楽しむ「二刀流」。リアルでやっていることをゲームで試したり、逆にやりたいことをシミュレーションしたり」と森田さん。平石さんも「相乗効果はある」と相槌を打つ。リアルではともにMF。長くコンビを組み息もぴったりだ。「平石君はカウンタが得意」「秀斗君は細かいパスがうまい。でも、フェイントはワンパターン」と認め（？）合う。

県予選連覇を狙ったが、6月27日に開かれた大会では大接戦の末、準決勝で敗退してしまっただ。一もつと練習して、来年こそは国体に出たいと森田さん。平石さんも「ずっとこのチームで頑張ります。目標はあくまで全国制覇です」と雪辱を誓う。「年を取っても障害があっても楽しめる。多くの人に魅力を伝え、前橋をeスポーツの聖地にした」と。今回監督を務めた森田さんの兄、卓也さんの夢は壮大だ。

HADO & ENNICH

最先端エンタメで遊ぶ、学ぶ

アクエル前橋地下1階は最先端技術を駆使したエンターテインメントの世界。AR（拡張現実）スポーツ「HADO」、デジタル技術を駆使した「ENNICHI」。ともに県内初登場だ。

「漫画の主人公の技」を体験

子供の頃に夢見た漫画のヒーローの技を繰り出して楽しめるHADO。自分の手からエネルギーボールを放ち、対戦相手を攻撃する。頭にヘッドマウントディスプレイ、腕にアームバンドを装着して準備完了。肉眼では見えないボールがディスプレイを通してはっきりと見える。試合時間はわずか80秒だが想像以上に身体を動かすため、試合後は肩で息をするほど。「ルールはシン



ブルで子供から大人まで楽しめる。戦略性もあるので頭も使い、ゲーム感覚で思い切り身体を動かせる。社員の栗原花奈さんが奥深さを語ってくれた。 HADOは世界大会も開かれている。国内には常設施設が9カ所。3面フィールドのアクエルは最大を誇る。

分身が八木節の達人に

光が漏れる参道を通り、6重の鳥

居を越えると、そこは不思議な「緑日」の世界。デジタル技術で作られた光と音が日本の伝統文化を再現する。まずは自分の分身、アバターを作ろう。3Dスキャンブースで撮影するだけ。「万緑舞」の巨大スクリーンは、いつの間にか自分のアバターが八木節を踊る姿を映し出している。樽太鼓が響き、お囃子が流れる、まさに夏祭りの世界。コロナ禍で開催できない祭りがここで楽しめる。



漫画のヒーローになった気分になれるHADO。飛んでくるエネルギーボールをかわして攻撃に移る(写真左)。ENNICHIは日本の文化に触れて、学ぶことができる日常とかけ離れた世界を楽しもう(写真右)

HADO 10時～20時 / 3プレー:1人600円、5プレー:1人1000円 / 初回レクチャー料:1組300円 / コートレンタル:平日1時間1組4000円、週末1時間1組6000円

ENNICHI 10時～20時 / 平日当日券:大人1800円、子供1000円 / 平日前売券:大人1500円、子供1000円 / 週末(土、日、祝日)当日券:大人2300円、子供1000円 / 週末前売券:大人2000円、子供1000円 ※子供は高校生以下。未就学児無料

ITで実現した 時空越えた授業

中央カレッジグループ
Chuo College Group.

県内で10の専門学校を展開する中央カレッジグループ（中島利郎代表、前橋市古市町）はIT化・デジタル化を加速させる。コロナ禍で従来の対面による集合教育が困難となる中、デジタル対応を強化。資格試験合格率や就職内定率でこれまでと変わらない高い成果を出している。他県の専門学校と連携し、教育コンテンツの共同制作やオンラインによる合同授業といった新しい取り組みを始めた。グループ内に設立したDXデザイン研究所では地域社会や中小企業のDX推進を支援している。

全国の仲間と連携

昨 年は新型コロナの影響で「教室に学生が集合して学ぶ」という従来の一般的な学校教育の前提が崩壊した年となった。この未曾有の危機を前に、中央カレッジグループでは「教育を止めないといけない」との信念のもと、オンラインを取り入れたハイブリッド型授業を展開し、就職率をはじめこれまでと変わらぬ成果をもたらし、中島利郎副代表にIT化の取り組みを聞いた。

「対面授業が困難な状況が続いています。学生はどう受け止めたのでしょうか。」
「対面授業ができなくなった時期があったのは悲しいことではありましたが、一方で、コロナ禍は課題であった教育のIT化やデジタル化を推し進めるきっかけとなりました。学校だけでなく、学生たちも否応なくその波に乗り、いまではオンラインによる遠隔授業やデジタル教材が当たり前の環境になっていきます。多くの学生は遠隔

授業を肯定的にとらえていて、教育環境が大きく変わる節目に大変さを実感しながらも楽しく取り組んでいます」
「IT化にどう対応しましたか。」
「Google Workspace などによる遠隔授業に加え、クラウドによる出欠管理、課題の提出・管理、オンライン就職活動への対応、学校行事のオンライン開催、配布資料のデジタル化を進めました。グループ内にDXデザイン研究所が設立され、IT技術を活用した教育に造詣の深い職員が配置されたことも大きな助けとなりました」
「対面授業が中心だったこれまでと比べ、教育の成果は？」
「結果として、従来と遜色のない成果を残すことができました。日商簿記1級や応用情報技術者試験といった難関資格に合格者を相次いで出すことができましたし、7校で就職内定100%を達成しました。公務員試験では過去最多の191人が最終合格しました。心



3密を避けるため、授業は対面とオンラインのハイブリッド型。出席は半数に絞られる。



中島利郎副代表

〔DXデザイン研究所〕

地域と企業のDXを支援

中央カレッジグループは昨年4月、DXデザイン研究所を設立した。AI（人工知能）やIoT（モノのインターネット）により事業革新を起こすデジタルトランスフォーメーション（DX）の普及が目的。中央情報大学校とCRI中央総研が母体となり、教育と経営コンサルの特性を生かし、中小企業や地域社会のDX導入を支援する。
ミッションは①中小企業向けのDX支援とコンサルティング②DX人材のコミュニティハブの構築③セミナーや情報発信による地域のデジタルリテラシー向上支援④アフターDXの次世代職業研究の4点。
具体的にはIoT・データサイエンスなどのITリテラシーやプログラミング・デザインスキルの教育、それらを通じてDXに繋がる業務改善・新規事業創出を担う人材の育成や企画提案のコンサルティング、アドバイザーにあたる。
DXはデータやデジタル技術を



小澤慎太郎所長

〔中央情報大学校〕

動画のプロを養成

中央カレッジグループの中央情報大学校（高崎市栄町）は2022年4月、ネット動画クリエイター学科を新設する。2年制。動画クリエイターや動画編集マーケターを目指す学生に専門教育を施す。
ユーチューバーが子供の人気職業となり、ネット動画が注目される中、既存の学科では得られない高度で専門的な知識、情報を提供する。制作力、実践力、発信力、現場力の4つを身に付けるための超実践型カリキュラムが特長。
企画、撮影、編集の全プロセスの指導を受けられ、現役クリエイターから現場で必要なスキルを学べる。企業との連携により、在学中からビジネスで活かせる発信力を磨くことができる。
さまざまなSNSや動画にかかわる職種に加えて、企業の広報・マーケティング部門の人材も養成する。
新学科について、五十部昌克



五十部昌克副校長

配しただけに心強い結果となったと同時に、教育の新しい可能性を感じさせるものとなりました」
「ピンチをチャンスに変えました。これからの取り組みは。」
「自分たちの学校だけに収めるのではなく、全国の専門学校とアライアンスを組むようになりまし。まずは、公務員養成や情報分野、動物看護分野の教育コンテンツを共同で制作しています。授業もそれぞれの教室をオンラインでつないで合同授業をしたり、東京から学校づくりを進めます。
これからは一定以上のデジタルリテラシーを身に付けることが必須条件になってきます。中央カレッジグループは教育を通して地域のあらゆる人にITやデジタルについて学ぶ場を提供していきたい、少しでも地域におけるデジタルデバイドをなくしていきたいと考えています。アフターDXの世界で職業がどのように変化し、働き方や求められる人材にどのような影響が出るのか、産業界と連携しながら実学を担う教育機関として対応していきます」

CHUO
中央カレッジグループ



〒371-0844
群馬県前橋市古市町1-49-1
https://chuo.ac.jp/
TEL.027-256-7000
FAX.027-253-5595

中央カレッジグループ
1942(昭和17)年創立の「前橋服装女学院」が前身。商業、経理教育に重点を移し、1988(昭和63)年、中央情報経理専門学校に改名。経理以外の幅広い分野で専門学校を開校する。本部は前橋市古市町。

グループ校
中央情報大学校／中央農業大学校／中央情報経理専門学校／群馬法科ビジネス専門学校／高崎ビューティモード専門学校／中央医療歯科専門学校太田校／中央医療歯科専門学校高崎校／中央動物看護専門学校／中央スポーツ医療専門学校／中央高等専修学校

ITの専門家

無人の車が街を行き交い、ドローンが空を飛び交う。SFのような未来都市がもうそこまで来ている。前橋は「ITの専門家」がいる街。

究極の夢は鉄腕アトム



おぎつ・たけき 1985年8月、東京都生まれ。慶応大環境情報学部一大学院政策・メディア研究科後期博士課程修了。博士。東京理科大学理工学部助教を経て、群馬大学大学院理工学府准教授。

日本モビリティ株式会社 2020年7月、群馬大学発ベンチャーとして設立した。16年12月に発足した次世代モビリティ社会実装研究センターを構築、自動運転の社会実装、無人移動サービスの導入を支援する。

上毛電鉄中央前橋駅〜JR前橋駅間で2月、自動運転によるバス運行の実証実験が行われた。高速通信規格5Gを活用した全国初の試みだった。

「取り組んでいるのは自動運転システムで走行しながら、群馬大の遠隔管理室でオペレーターが支援する仕組み。5Gを使ったことでバスからの映像が明らかに高精細で遅延なく送られてきました。4Gによる従来方式に比べて2倍以上速くの道路状況をオペレーターが認識することができた。無人運転でも安全かつ快適に走行できることが証明されたといえます」

スーパーシティ構想でも自動運転システムが含まれている。

「膨大に集まるデータの利活用が期待される。例えば自動運転による運行で得た乗客のデータを別のビジネスにつなげることができれば、そこから生じた利益を還元することで、無料または安く乗車できるようになる。逆に、他のデータを使得って自動運転をより便利に効率的にできるかもしれない」

「自動運転オタク」と称される第一人者。研究は2004年から。「究極の夢は鉄腕アトム。それを実現するために大学に入り、自動運転の研究室を見つけて、アトムの先祖は自動運転なのではと考えた。まずは車のロボット化、自動運転を実現させることがアトムへのマイルストーンかなと」

完全自動運転を現代版「どこでもドア」と表現する。

「30年後の前橋を想像します。自動車でご飯を食べながら移動するレストラン、寝ている間に移動するホテルになる。移動を感じずにドアを開けたら目的地に着くことができるのです。車両同士が通信し合い、わずかな車間距離で安全に多くの車が走るので、渋滞が解消され、事故も激減する」

自動運転でかなう「どこでもドア」

日本モビリティ取締役会長

小木津武樹

photo by Koichiro Nomoto

インドの農村で見た真の有機農業

プレマ社長

飯野晃子

photo by Shunichi Oda
hair & make-up by Maho Ogawa
photo retouch by Shinji Uezumi

赤城山を背に緑が広がる。露地ハウス合わせて11ヘクタールで小松菜を有機栽培している。農場はグローバルGAP認証も受けている。葉は緑が濃くて肉厚。生で食べると、茎の甘さに驚かされる。

「清らかな水、豊かな陽光、澄んだ空気。赤城の恵みをいただいて、安全安心でおいしい野菜を育てています。中に目に見えない微生物がいることで豊かな土壌になる。有機農業だから、虫は出るし、雑草との戦いもあります。赤城の生態系の中で農業をさせていただいていることに感謝しています」

2児の母。前橋と東京の二重生活、仕事と家事の二刀流が続く。「コロナ禍の前から業務連絡や会議などLINEやZoomを活用し、リモート体制を整えました。私たちの小松菜は工場製品ではなく、土で育てる有機農産物ですから、すべてIoTというわけにはいかず、目、手、口（舌）など人間の感覚をフル活用しますが、それでもIoTの活用で便利になりました。IoTを活用しながら、自然と寄り添い、人間らしい感覚を大切にしつつ、笑顔で楽しく有機農業に取り組んでいきます」

学生時代に一人暮らしを始め、食生活の大切さに目覚めた。「大学院の研究でインドを何度も訪ねました。牛糞やハーブなど身近なものを活用して生産する、文字通り循環型の有機農業を目の当たりにして、化学薬品に依存する近代農法の問題や地球規模での持続可能な発展のあり方を考えさせられました」

スーパーシティ構想にはセットとなるスローシティを推進する立場から事業を提案した。「単なる生産現場としての農場から、農業体験やオーガニック食品を味わえる場として農園を進化させていきます。収穫体験をしたり、フレッシュな有機小松菜を味わったり、オーガニックを体感してほしい。お子さんの食育にもいいでしょう。首都圏から近いので交流人口を増やし、移住にもつながると思います」

いいの・あきこ 1979年10月20日栃木県足利市生まれ。津田塾大英文科卒業、東京大大学院修士課程修了。2015年からプレマ社長。日本ヒーリングフード協会代表理事を務める。

株式会社プレマ（プレマ・オーガニック・ファーム） 1996年創業。周年で有機小松菜を栽培。小松菜パウダー、小松菜生うどんなど加工品も販売する。資本金1000万円。従業員約35人。前橋市粕川町下東田面。



ヒラメは前橋に限る

前橋市で獲れたヒラメを市内の飲食店で食す――。夢のような話が現実となった。環境技術研究所（前橋市）はヒラメの養殖事業が軌道に乗り、本格的に出荷を始めた。前橋育ちのヒラメはおしゃれなフレンチに生まれ変わる。

前橋市中心街に昨年誕生した白井屋ホテルの「ザ・レストラン」。黒いカウンターの上に「まえばし産ヒラメ 夏野菜」と題した白い皿が置かれた。ヒラメは調理の直前、六供町にある環境技術研究所開発センターから届いた。1*。弱、型のいい活魚だ。

薬品使わず水浄化

20年前、嶋田大和社長が大学の同級生だった梅津剛前橋工科大准教授に委託して養殖が始まった。不可能を可能にしたのは循環システム。前橋の水道水で作った海水を浄化する。機械も活用するが、エースは何とバクテリア。有害になる成分をバクバク食べてくれる。水がきれいなら病気がかからず、養殖で一般的な薬品は一切使わない。水温、餌の量やタイミング。データを分析して最適な飼育方法を編み出した。まさに、「ITのヒラメ」だ。

頭も骨もすべて使う

「頭も骨もソースにして、余すところなく使いました」。片山ひろシェフが料理を説明する。淡泊な身はエンガワを挟むことでコクを与えた。

嶋田社長は初めての試食。「ヒラメの活魚といえば活造り。フレンチは違和感があった」と不安そうだったが、フォークで口に運ぶと笑顔が広がる。「運動量が少ないから心配したけど、身はプリプリ。シェフが最高に仕上げてくれた」と絶賛する。「上州キュイジーヌがコンセプト。前橋育ちのヒラメを使って、ここでしか食べられない新しいフレンチであり、郷土料理をお届けしたい」とシェフは目を輝かす。

環境技術研究所 水質浄化装置を開発・販売するベンチャー企業として2001年設立。ヒラメやトラフグの内陸養殖を手掛けている。飼育技術や水質浄化装置を含む養殖システムを販売する。

白井屋ホテル「ザ・レストラン」 前橋市本町2-2-15 12時～14時半（週末・祝日のみ、最終入店13時半） 17時半～22時（最終入店20時半）／年中無休／要予約 ☎027-231-4618



嶋田大和社長（左）と片山ひろシェフ



一つのいのち
一台のSUBARU

クルマが共にする一つのいのちを、思う。
そのいのちの輝きを、全力で守り抜く。
それが私たちSUBARUの使命。
何でもやる。何度でもやる。徹底的にやる。
あなたという、この世にたった一つのいのちのために。
一つのいのちの力を信じ、一台一台の安全を磨き上げていく。
あなたから生まれる、夢や挑戦、希望、愛、笑顔。
あなただけの未来を、SUBARUは見てみたい。
そう遠くない未来、
例えば2030年、どんなあなたでいたいですか。



富士スバル

富士スバルは土日営業 毎週月曜日、第一・第三火曜日、平日祝日定休
本社／前橋市本町2丁目11番2号 TEL.027-221-8111(代)
太田支社／太田市飯塚町1620-1 TEL.0276-45-3986(代)

富士スバルホームページ <https://www.fujisubaru.co.jp/> 富士スバル 検索
営業時間 10:00～19:00(サービス受付18:00まで) 日・祝日 10:00～18:00(サービス受付17:00まで)

新前橋店 ☎(027)251-3311(代) 太田店 ☎(0276)45-3986(代) 伊勢崎日乃出店 ☎(0270)24-3422(代)
前橋50号店 ☎(027)224-5184(代) (サービス専用) ☎(0276)45-3980 伊勢崎つなとり店 ☎(0270)26-5445(代)
前橋かわはら店 ☎(027)233-1151(代) 太田西店 ☎(0276)31-7001(代) 渋川店 ☎(0279)22-3251(代)
高崎倉賀野店 ☎(027)346-1361(代) 大泉店 ☎(0276)62-4521(代) 沼田店 ☎(0278)24-1133(代)
高崎問屋町店 ☎(027)361-2301(代) 館林店 ☎(0276)75-1441(代) 富岡店 ☎(0274)62-3535(代)
太田50号店 ☎(0276)37-3222(代) 桐生店 ☎(0277)52-0175(代) 藤岡店 ☎(0274)22-4198(代)

SUBARU認定中古車店

カーズポット前橋・吉岡 ☎(0279)55-6978(代) カーズポット太田 ☎(0276)45-3933(代)
カーズポット高崎 ☎(027)363-1300(代) G-PARK伊勢崎 ☎(0270)40-6363(代)
カーズポット中之条 ☎(0279)25-7830(代)
写真はイメージで、印刷インクの性質上、実際の色と異なって見えることがあります。

ステイプの指示はメールで、だいたい2行でした。議論していると、突然、『What do you think (あなたはと思う)』と聞いてきました。口癖ですね。そこで、まともに答えられない人は次の会議に呼ばれない。

一方で、『I don't care what they say (やつらが何を言っても関係ない)』とも言おう。意見はしっかり聞き尊重するけど、自分で決めたことは周りが何を言っても聞きませんでした」

街づくり
若者が大きな戦力

――4月に前橋工科大の理事長に就任しました。

「理想とするのは米国の地方にある大学のように、大学とコミュニティが一体となることです。米国では例えば、有名な医学部があれば医療産業が盛んだったりします。大学の研究成果と企業の活動が一体となっているのです。特に理系は役に立つというか、貢献できますね」

――専門性の高い分野で第一人者の指導者がいます。

「例えば、生命情報学科はゲノム情報の解析をしているが、全国に4つしかない。地方では唯一だ。システム生体工学科は全国にここしかない。医療と工学の接点ですね。脳の働き方を研究していて、アルツハイマー研究では世界でも最先端をいっています」

――高校との連携が求められます。

「学生の出身地をみると、群馬県内は2、3割程度。前橋市内からは1割にも満たない。その原因は何か。高校生が工科大のことを知らないからです。どんな授業をやっている、卒業したらどんな仕事に就くのか。

広報と発信には力を入れます。市内の高校とオンラインでつないで授業を公開したいですね」

――学生にはどんな期待をしますか。



ふくだなおひさ 1962年7月、吉岡町生まれ。前橋高一東京大文学部卒。米ダートマス大経営大学院(MBA)修了。アップル本社で副社長に就任、ステイプ・ジョブズを支える。2002年、日本通信に入社、15年から社長。今年4月、前橋工科大理事長に就任する。

ランゴスタの娼婦風スパゲティ



田毎庵本店のカレーうどん
太く、もちもち
優しくて病みつき感

「思い出の味といえば『田毎のカレーうどん』かな。強烈な個性はなくて優しい味。病みつき感があった」。和洋さまざまに鼎新にした店の中から選んだのは街中にあった「田毎庵本店」だった。「寒い日はもちろん、夏も汗をかきながらフーフー言ってすするのが最高」と懐かしむ。鰹節の出汁が利いたカレーは黄色がかり、ドロツとしている。「うどんは太く、もちもち。カレーによく絡んだ」と思い出の味を食レボする。

2009(平成21)年、火事で焼失そのまま閉店した。支店が市内に3店あったが、いずれも暖簾を下げた。大手町支店で修業した飯野三男さんが

切り盛りする渋川市の「そば処 田毎」はカレーうどんを守っている。

田毎庵以外に福田さんが「思い出の味」に挙げたのは「ランゴスタ」の娼婦風スパゲティ、「桑風庵」の蕎麦、「ペペロンチーノ」のイタリアン、「ニューデリー」のカレー、「天よし」の天ぷら、「はまると週に10回、行った店もあります」。凝り性の一面をのぞかせた。



そば処 田毎のカレーうどん

「もちろん、研究をしっかりとやらうのが一番。私が期待したいのは大学の外にどんどん出て行ってほしいということ。学生は全国から集まっていますが、コミュニティとの接点がありません。学内だけで生活が完結しているようで、同世代としか交流がない。街づくりとか、自由な発想力を持った若者は大きな戦力になる。コミュニティと縁を深めて、前橋を好きになってほしいですね」

――前橋市が推進するスーパーシティ構想。どんな街になるのでしょうか。

「一言でいえば、心地よい街になります。私は『デジタルのゆりかご』という言い方をします。例えば、居心地のいいレストラン。味はいいし、スタッフの対応も最高にいい。さらに、前回来たときはこういう料理を出したから今回は別のにしようとか、自分のことを分かってくれた上でもてなしをしてくれる。そういうサービスはデジタル技術を使うと簡単に実現できます」

――全国31の都市が申請しました。前橋のアピールは独特だったようです。

「スーパーシティというSFチックな未来都市を思い浮かべる人が多いかもしれませんが。そうではなく人が中心の未来都市です。前橋市がアピールしたポイントです。だから、スーパーシティ×スローシティにしました。安全安心に関しても全国一でしょう。カギとなるのが『まえばしID』です。アップルIDの創設にも関わりましたが、まえばしの方が断然、安全性が高い。IDを取得する際は徹底して本人確認します。なりすましができないようにし、ハッキング対策も十分に講じています」

40年前はツケ顔認証で顔パスに

――ITに不慣れなお年寄りはいいていけなくなりませんか。

「技術に人が寄るのではなく、技術が人に寄り添うべきなのです。40年前は顔認証で決済ができていたんです。ツケですよ。魚屋さんでも、飲食店でも。ちよつと財布を忘れちゃったから今度来るときに払うよとか、月末にまとめてとか。だから、まえばしIDはスマホだけでなく顔認証も入れた。少額だったら顔パスができます」

――連携事業者として159社が認定されました。

「全国で圧倒的にトップです。7割が東京など大都市、地元は3割。日本通信も前橋に30人ほど社員を送り込みます。東京にある多くの企業がここにオフィスを構えることになるでしょう。そうやって初めて構想が動きます。これほど多くの企業が集まったのは前橋の波動を感じたから。『めぶく。』という2016年に策定されたビジョンのもと、街づくりが着々と進行しています。スーパーシティ構想もそうですが、民間主導です。『前橋おもしろいぞ』『前橋動くぞ』と。街づくりが現在進行形だから集まってきた」

――米国留学を経てアップルの日本法人に入りました。

「入社1日目、社長に社内メールで『いまの経営課題のブリーフィングを明日の3時からやってくれ』と送った。営業本部長には『営業戦略の見直しを5時から教えて』と。後から聞きまして、まあとんでもない社員が入ってきたと話題になったらしいですがね」

――ステイブ・ジョブズと出会うことになりました。

「アップルジャパンの三分の二の事業責任者をしていた時期でした。ある時、『グローバル戦略を聞きたい』と呼ば

スーパーシティ

心地よい

デジタルのゆりかご

naohisa fukuda

福田尚久

米アップル元副社長
日本通信社長

前橋市が推進するスーパーシティ構想で、計画の統括者「アーキテクト」を務める福田尚久さん。アップルでは副社長となり、ステイブ・ジョブズとともに巨大企業に成長させた。日本通信の社長であり、今年4月から前橋工科大理事長の肩書が加わった。4つの顔を持つ男が故郷の明日を劇的に変える。

全国5カ所、大幅な規制緩和

スーパーシティ構想：AI（人工知能）やビッグデータを活用して、医療、交通、教育、行政手続きといった市民生活のさまざまな分野で最先端のサービスを可能にする。全国5カ所を選定する。

iPad、iPhoneの「生みの親」 2011年10月、56歳で亡くなる



© gettyimages

ステイブ・ジョブズ：アップルを創設したカリスマ経営者。「iMac」を大ヒットさせ、「iPad」、「iPhone」を生み出した。福田氏は副社長として支えた。

女子の比率が高い工科系大学

前橋工科大：1952年創立の前橋市立工業短大を前身とし、97年に設置された。全国でも珍しい公立の工科系単科大学。女子学生が3割と多い。6学科ある。

ボート、缶蹴り、水道タンク

思い出：子供のころは敷島公園で遊んでいました。松林の中で缶蹴りしたり、ボートで競争したり。売店の自販機のオレンジジュース懐かしいな。水道タンクが好きでしたね。

俗世間からかけ離れた哲学者

会いたい人：群大で教授をされていた故・河合文彦先生です。俗世間とかけ離れた方で、哲学者でした。どんな分野にも造詣が深く、徹夜で話をしました。スーパーシティをどう思うでしょうか。



机を廊下に運んでサボる

高校時代は昼前に机を廊下に運んでサボりました。喫茶店に行って友人と議論しました。憲法九条とか、国民の知る権利とか。いま考えると生意気でしたね。卒業式の時、「君が代」を強制的に歌わせられそうになり、戦いました。（写真左）

れ、4時間、5時間にわたって議論した。これが最初の出会ひ。ポルシェを例に、地球を一つの市場としてとらえ、同じ製品を販売するべきだと強調しました。

――最初の印象はどうでしたか。

「頭いいなと感じた人はいっぱいいたけど、これまで会ったことのない、図抜けて頭のいい人。単純な頭の良さでなくて、スマートな人でしたね。理解力がすごかった。

98年から99年にかけて、よく日米を往復した。金曜の夕方、成田をたつと、金曜の朝、カリフォルニアに着く。そこからステイブと私で一日レビューする。土曜日は朝から打ち合わせして、昼のフライトで日本に戻ると日曜日の朝着く。月曜日に出社すると、ステイブの優秀な秘書から電話があり、また来いと。そんな繰り返しだった」

忘れぬ ステイブの言葉

――印象に残っている「言葉」は。「ステイブとのエピソードはいっぱいあるけど、言葉でいえば3つ、『Think different』『What do you think』『I don't care what they say』ですね。決して忘れられません。『Think different』はキャンペーンをしましたが、もともとは社内へのメッセージなんです。『Think』を重ねゼロから始めることを徹底しようという意味なんです。

bridge side 特集〈IT〉

取材◎阿部和也
text by Kazuya Abe
撮影◎小林みのる
photo by Minoru Kobayashi



特集

ITと言葉

[ITの先人]
福田尚久
スーパーシティ
心地よい
“デジタルのゆりかご”

[ITの専門家]
小木津武樹
自動運転でかなう
「どこでもドア」

[ITの希望]
伊佐碩恭
天才プログラマー
医療と融合し進化を

aco
笑顔でデカ盛り完食

暴れん坊FC
目標は全国制覇
マエバシを聖地に

スーパーシティと
有機農業
赤城から世界へ
akiko iino

飯野晃子

農業生産法人プレマ社長

photo by Shunichi Oda hair & make-up by Maho Ogawa photo retouch by Shinji Uezumi

〈めぶく〉前橋発、新しい風

創刊号  no.1, take free
web版 mebuku
mebuku.city
the maebashi shinbun

me bu ku